

就実大学・就実短期大学
自己点検・評価・改善に関する外部評価委員会
報告書



Shujitsu University
Shujitsu Junior College

2023年12月

就実大学・就実短期大学外部評価委員会

目 次

I. はじめに	1
II. 外部評価実施概要.....	2
1. 日程等	2
2. 外部評価委員名簿	4
III. 2023 年度就実大学・就実短期大学自己点検・評価に係る外部評価委員会評価.....	5
1. 総括評価	5
2. 「就実大学・就実短期大学 中期計画」に関する 2022 年度の点検・評価に係る 外部評価委員会評価.....	5
2-1. 【評価できる点】	5
2-2. 【改善を要する点】	6
2-3. 外部評価委員からの意見（提言）	6
2-4. 2022 年度点検・評価に係る自己評価点並びに 外部評価委員評点.....	別表参照
3. 「2022 年度教育プログラム」に関する自己点検・評価に係る外部評価委員会 評価	8
3-1. 【評価できる点】	8
3-2. 【改善を要する点】	8
3-3. 部局別評価.....	8
3-4. 外部評価委員からの意見（提言）	12

I. はじめに

就実大学・就実短期大学では、2021年より学外評価委員による外部評価委員会を実施しています。第1回外部評価委員会は2021年3月に開催され、「就実大学・就実短期大学中期計画」（2020年3月～2025年3月；以下、中期計画）に関する2020年度実績の点検評価と、2019年度の教育プログラムに関する大学・短大・各学部学科の自己点検評価の二つについてヒアリングが行われました。2021年9月には第2回外部評価委員会が開催され、2020年度の教育プログラムに関して大学・短大・各学部学科が実施した自己点検に対してヒアリング及び評価が行われました。2022年8月には第3回外部評価委員会が開催され、中期計画に関する2021年度実績の点検評価と、2021年度の教育プログラムに関して大学・短大・各学部学科が実施した自己点検評価に対するヒアリング及び評価が行われました。年度ごとに委員会から報告書が提出され、その内容は、本学の自己点検・評価・改善委員会を通じて教職員に周知を図るとともに本学ホームページにおいて公表しています。

中期計画に関する点検評価と教育プログラムに関する自己点検評価の二つのヒアリングを限られた時間の中で一度に行うことは、時間的にも無理があると考えられたことから、本年度は中期計画に関する2022年度実績の点検評価に対するヒアリングを行う2023年度第1回外部評価委員会は2023年7月5日に、教育プログラムに関する自己点検評価に対するヒアリングを行う2023年度第2回外部評価委員会は2023年8月30日に、それぞれオンラインで開催されました。4名の評価委員からは、それぞれのお立場やご経験に基づいた視点から、本学の教育・研究活動について貴重なご意見を数多く頂戴致しました。中期計画の進行状況について、評価できる点と改善を要する点について、組織ごとに丁寧に評価していただきました。また、大学・短大全体の教育プログラムについても、教育の質の向上に関する本学の取り組みを評価していただくとともに、具体的な課題を指摘していただくとともに、本学のさらなる発展に向けた提言も多くいただくことができました。

外部評価委員の方々には、本報告書を通じて改めて感謝申し上げますとともに、いただいたご意見やご指摘を自己点検・評価・改善委員会並びに全学及び部局ごとのFD研修会等を通じて学内で共有し、本学の教育研究活動の改善につなげるよう教職員全体で取り組んでまいりたいと思います。

就実大学・就実短期大学
内部質保証推進室
担当副学長 見尾 光庸

Ⅱ. 外部評価実施概要

1. 日程等

2023 年度就実大学・就実大学大学院・就実短期大学 自己点検・評価・改善に関する外部評価委員会を下記のとおり実施した。

第1回「就実大学・就実短期大学 中期計画」に関する 2022 年度の自己点検・評価・改善に関する外部評価委員会

日 時 2023 年 7 月 5 日（水）16 時 28 分～18 時 33 分

場 所 オンライン会議（Zoom）

出席者

外部評価委員（○は委員長）

井野瀬久美恵氏（甲南大学 文学部教授）（※書面評価）

○佐々木健二（岡山大学 名誉教授）

福田正彦（株式会社丸五 代表取締役社長）

山田昌治（両備ホールディングス株式会社 取締役常務執行役員）

学内関係者

桑原和美（学長・短期大学部長）

見尾光庸（副学長，学官地域連携センター長代理）

石原みちる（副学長・教育学部長）

矢吹優子（法人事務局次長，管財部長，事務部長）

神宝和美（法人事務局次長，総務部長）

前川隆弘（入試部長）

日高靖和（キャリア支援・開発部長）

渡辺雅彦（教務部長）

丹生裕一（学生部長）

末丸克矢（保健管理部長）

L. ダンテ（国際交流部長）

川崎剛志（図書館長）

藤田知里（教育実践研究センター長）

中西裕（教育開発センター長）

石黒太（教育開発センター准教授）

松原正充（内部質保証推進室長，総合企画課長）

犬飼道代（内部質保証推進室員）

大下洋一（内部質保証推進室員）

第2回「就実大学・就実短期大学 教育プログラム」に関する 2022 年度の自己点検・評価・改善に関する外部評価委員会

日 時 2023年8月30日（水）10時00分～12時07分

場 所 オンライン会議（Zoom）

出席者

外部評価委員（○は委員長）

井野瀬久美恵（甲南大学 文学部教授）

○佐々木健二（岡山大学 名誉教授）

福田正彦（株式会社丸五 代表取締役社長）

山田昌治（両備ホールディングス株式会社 取締役常務執行役員）

学内関係者

桑原和美（学長・短期大学部長）

見尾光庸（副学長，学官地域連携センター長代理）

苅米一志（副学長・人文科学研究科長）

石原みちる（副学長・教育学部長）

井上あえか（人文科学部長）

浅利尚民（表現文化学科長）

小田希望（実践英語学科長）

渡邊将智（総合歴史学科長）

楠博文（初等教育学科長）

鈴木国威（教育心理学科長）

北村佳久（医療薬学研究科長）

森秀治（薬学部長）

守谷智恵（薬学科長）

古塚秀夫（経営学部長）

宮前善充（経営学科長）

ズビャーギナ章子（短大部長・幼児教育学科長）

三宅統（生活実践科学科長）

石黒太（教育開発センター准教授）

矢吹優子（事務部長）

松原正充（内部質保証推進室長）

森本達也（内部質保証推進室員）

大下洋一（内部質保証推進室員）

犬飼道代（内部質保証推進室員）

2. 外部評価委員名簿

任期：令和5年2月24日～令和7年2月23日

井野瀬 久美恵（甲南大学 文学部教授）

○佐々木 健二（岡山大学 名誉教授）

福田 正彦（株式会社丸五 代表取締役社長）

山田 昌治 両備ホールディングス株式会社 取締役常務執行役員）

○は委員長

Ⅲ. 2023 年度就実大学・就実短期大学 自己点検・評価に係る外部評価委員会評価

1. 総括評価

2023 年度就実大学・就実短期大学自己点検・評価に係る外部評価は、自己点検・評価を通じて明らかとなった諸問題に対して、大学が適切に改善を行っているのか、さらに、自己点検・評価が教育プログラムの質向上を図るシステムとして有効に機能しているかという観点から、就実大学・就実短期大学から提出された2022 年度中期計画並びに教育プログラムに関する自己点検・評価報告書を基に、書面調査ならびにヒアリング（2023 年 7 月 5 日および 8 月 30 日）を実施した。点検結果の評価判定については、本外部評価委員会設置の趣旨を踏まえ、大学基準協会が示す基準に必ずしもよることなく各外部評価委員の知見や経験に照らして優れた取り組みや改善すべき点を評価することとした。

その結果、就実大学・就実短期大学においては、教育改革への高い意識のもと、自己点検・評価報告書に課題解決への取り組み状況や新たに明らかとなった課題ならびに今後の展望等がまとめられており、中期計画並びに教育プログラムに基づいた 2022 年度実施計画が適切に実施されていると判断する。特に前年度に改善事項として提言した問題について、誠意ある取り組みが行われたことを高く評価したい。

大学を取り巻く環境の厳しさが増す中、学生ならびに社会の期待に応えるため、大学の方針を明確に示した上で、内容によっては具体的な数値目標や達成期限をより厳密に定め、学長のリーダーシップの下、各取り組みを推進することにより、特色ある人材教育、産学連携、社会貢献に取り組むことを期待する。

とりわけ、後述の【改善を要する点】以降で指摘する課題については、改善に向けて努力していただきたい。

2. 「就実大学・就実短期大学 中期計画」に関する 2022 年度の点検・評価に係る外部評価委員会評価

2-1. 【評価できる点】

○特徴的な事項としては下記のもの挙げられる。

- ・コード 422 に関して、「本年度の具体的取組計画」に基づき、Webclass を利用した利用案内教材を年々更新するとともに、電子図書館（就実 LibrariE）の運用、学生協働の推進、倉敷考古館の整理等多くの取り組みに対して成果を上げていることを評価する。
- ・コード 432 に関して、障がい学生が自立して自身の学習・生活スキルを向上させる支援の一つとしての情報発信サービス(Learning Support Book: LSB)の導入・活用をはじめとした、多くの学生相談・支援活動の整備・拡充を評価する。
- ・コード 435 に関して、GPS-Academic の導入により退学リスクの高い学生への早期アプ

ローチが可能となる態勢が整いつつあることを評価するとともに、各学科からのフィードバックを次年度に反映させていくようなシステムの一日も早い確立を期待する。

- ・コード 861 に関して、「本年度の具体的取組計画と数値目標」に記された取り組みを実施し、さらに研究ならびに研究倫理審査の情報を公開するためのオプトアウトのページを充実させる等、当初の計画になかった取り組みを行ったことを評価する。

2-2. 【改善を要する点】

○特に注意を要する事項としては下記が挙げられる。

- ・KPI の記載が昨年度より増えたものの、まだ少ないと考える。
- ・コード 221 に関して、可視化システム、ループリック評価システム共に当初計画よりも大幅に実施が遅れていることから、可視化システムの本格稼働ならびにループリック評価システムの早急なる導入を進めていただきたい。同様に、コード 222 に関して、アンケートの回収率を上げるため「リマインド」をかけるだけではなく、「別のアプローチ」を早急に見出していただきたい。

2-3. 外部評価委員からの意見（提言）

- ・前年度の点検評価を受けての PDCA を回すスピードの遅さがあり、分析力、表現力が不足している。勿論すべてに優れた評価であることはなく、年度によって差はあつて当然だが、自己評価に 1 点や 2 点が散見されるのは取組計画に無理があるのではないか。もし無理が無いとするのなら、「なぜ評価が低いのか」を語る言葉を持ってほしい。
- ・自己評価だけを記載するのではなく、「効果のあつた取り組み」や「実施した結果、どのようになったか、どのような効果が生まれたのか」までを記載するべきと考える。
- ・コード 111 に関して、建学の精神が校名になっているのは大きな特色であり、「去華就実」は普遍的な価値であるとともに共感性も高いことから、「就実力」というフレーズとともに、大々的にアピールすべきであろう。残念ながら、現在のホームページの「就実力が効いてくる」のロゴにはインパクトを感じず、アクションプランの「周知を図る」と合致していないと思われる。
- ・ホームページにおける「実に就くプロジェクト」に関して、学部学科で温度差が見られ、掲載内容が統一されていないように思われる。現在のネット社会においては、ホームページ等の印象によって外部に魅力をアピールできる部分もあるので、今後、工夫をしていただきたい。
- ・コード 231・232 に関して、「取り組みを一気に進めるのは難しいながらも、継続的に進めていきたい」との説明であつたが、利用率や他業務の影響で達成できていないのであれば、取り組み計画に記載された指標や、目標設定が間違っているのではないかと危惧

する。

- コード 435 に関して、GPS-Academic の導入により退学リスクの高い学生への早期アプローチが可能となる態勢が整いつつある点を評価するとともに、各学科からのフィードバックを次年度に反映させていくシステムを早期に確立するなど、目標達成に向けての取り組みを一層進めていただきたい。
- コード 436 に関して、TA や SA は人間力を効果的に高めるためのトレーニングとして、とても有効であると認識している。そのため、ファシリテーター研修、丁寧なフォローアップ教育をするなど、就実流の TA、SA 制度の実践を通じた人間力アップ講座のようなものができることを大いに期待している。
- コード 451 に関して、この中期課題に企業人として注目している。PDCA を回しながらブラッシュアップを重ねていくことを期待する
- コード 821 に関して、事務職員評価について、各自の目標達成評価とするために処遇への対応を行わないとしていることに対して疑問を感じる。「中期計画」の取り組み計画に「公正な人事、処遇改善を推進する」と明記されているにも関わらず、なぜ処遇に反映させないのか。何年も同じ状態が続いていると結果的に個人のスキルは上がっていかないのではないのか。評価が難しい職種があっても工夫することで、処遇への対応は可能ではないだろうか。法人事務局の説明では「職員一体となって取り組めていないことに関しては、評価する側の研修がしっかりできていない点も一因である。」とのことだが、是非研修等を積極的に行い、処遇改善を進めていただきたい。
- コード 841, 851 に関して、実施状況に記載された内容では実施内容とその結果が不明瞭であることから、外部者にもわかるような結果の書き方をしていただきたい。

3. 「2022年度教育プログラム」に関する自己点検・評価に係る外部評価委員会評価

3-1. 【評価できる点】

○特徴的な事項としては下記のもの挙げられる。

- ・学生の成績評価に偏りがあることを、2021年度、2022年度外部評価委員会で指摘したところであるが、昨年度と比較して、かなりの学部で改善されていることを評価する。
- ・数理・データサイエンス・AI リテラシープログラムに関する教育への取り組みは、新たな「読み書き、そろばん」として必須のものであり、時代のニーズに沿ったものと認識している。また、本プログラムが有意義であることについては、学習成果やアンケートから覗うことができ、「必修科目として大学、短期大学ともに96%の学生が熱心に受講されている」ことも含め、その取り組みを評価すると共に、今後のより踏み込んだ内容と分析の実施に期待する。

3-2. 【改善を要する点】

○特に注意を要する事項としては下記が挙げられる。

- ・「外国語教育科目群」の単位取得状況は問題が無いにもかかわらず、「2022年度卒業時アンケート」調査結果において、外国語の運用能力のスキル習得に関して、経営学科(1.6%)をはじめ、他の多くの学部・学科で非常に低い値を示していることから、改善が必要と考える。

3-3. 部局別評価

人文科学研究科

【評価できる点】

- ・特になし。

【改善すべき点】

- ・特になし。

人文科学部

【評価できる点】

- ・学部・学科のDPがわかりやすく、科目内容とDPの内容の連携が分かりやすくなったことを評価する。

【改善すべき点】

- ・2022年度卒業判定において、3学科(表現文化学科、実践英語学科、総合歴史学科)と

も卒業不可のものが1割近く存在する（表現文化学科 卒業58名 卒業不可11名、実践英語学科 卒業59名 卒業不可11名、総合歴史学科 卒業72名 卒業不可7名）という状態は改善すべきと考える。

人文科学部 表現文化学科

【評価できる点】

- ・特になし。

【改善すべき点】

- ・特になし。

人文科学部 実践英語学科

【評価できる点】

- ・昨年度の外部評価において、「教育プログラムの点検・評価・改善」で肝要なのは「点検・評価・改善」で必要とされる情報を絞り込むことであり、「どのような内容を」「どのような分量で」「どのようなデータに基づいて」記述すべきなのか、組織として統一方針を示す必要があると指摘したが、それを踏まえて、学科として根拠資料・データの内容・分量・提示方法を改善したことを評価する。

【改善すべき点】

- ・特になし。

人文科学部 総合歴史学科

【評価できる点】

- ・1年次を対象とする「総合歴史基礎ゼミナール」等の専門教育科目に少人数の担任制を設け、学生に対する丁寧な支援に努めると共に、学科会議において、成績不振の学生等に関わる情報の共有を図り、修学面での課題を抱えている学生を把握し、迅速に対応していることを評価する。

【改善すべき点】

- ・特になし。

教育学研究科

【評価できる点】

- ・公認心理師および臨床心理士の2資格の受験資格の取得を目指す学生の為、カリキュラムが過剰負担にならないようにしていることを評価する。

【改善すべき点】

- ・特になし。

教育学部

【評価できる点】

- ・一部の科目の除き、昨年度までに見られた各教科の評価の偏りが改善されていることを評価する。
- ・相互の授業参観を学部FDの一環と位置付けるため、教員評価の項目として加え、タイムラグのない連絡体制とするなど、多くの教員が参加するように体制を整え、授業方法の向上や授業者間の情報共有による教育内容の向上を目指していることを評価する。

【改善すべき点】

- ・昨年度も同様の指摘をしたが、「教育学概論（初等）」のS評価への偏りが改善されていないのはなぜか。コロナ禍により本講義はオンデマンドで実施しており、さらに教員の異動のため、この科目だけ非常勤講師に引き継いだ形で実施となったとのことであるが、専任教員と非常勤講師で評価に温度差があることは、学生の不利益に直結するものであり、早急なる対応が必要と考える。非常勤講師への成績評価後の是正については伝え辛い部分もあるかもしれないが、成績が出た段階で成績分布について学部・学科でチェックをし、偏りが大きい場合は是正を大学として求めるべきと考える。

教育学部 初等教育学科

【評価できる点】

- ・2023年度からスタートさせた新教育課程をさらに発展・充実させるために、他学科受講による中学校教諭二種免許の取得の可能性を探り、実現できるように検討を行っていることを評価するとともに、その進捗に期待する。

【改善すべき点】

- ・特になし。

教育学部 教育心理学科

【評価できる点】

- ・特になし。

【改善すべき点】

- ・特になし。

経営学部 経営学科

【評価できる点】

- ・新規DP1が学生等にとって旧のものより分かり易い（能力をイメージし易い）ものに修正されたことを評価する。

【改善すべき点】

- ・特になし。

医療薬学研究科

【評価できる点】

- ・教育研究活動の質向上を目指して、年度始めに医療薬学研究科委員会において「マニフェスト」を全教員に明示して周知を行っていることを評価する。

【改善すべき点】

- ・特になし。

薬学部 薬学科

【評価できる点】

- ・卒業時アンケートの結果が2021年と比較して全体的に改善されていることを評価する。
- ・低学年から「学びの習慣」を実に付けることを徹底させる目的で、学修支援センターにセンター長を置いて強化を図り、効果的に運用する方策を立てて実施しており、センター主導で、1年生全員に対して学修・生活に関する面談を行うとともに、質問対応会や補講などの多面的な学修サポートを行っていることを評価する。

【改善すべき点】

- ・2022年度の学生の成績が「ゲノム科学」においてはD評価が37%、E評価が23%となっており、授業改善の余地があるように思われる。

短期大学

幼児教育学科

【評価できる点】

- ・DP6の項目に、「2021年度、2022年度はクラスよってS評価に偏る傾向がみられたが、本年度は、授業間の偏りは穏やかに是正されていることを評価する。

【改善すべき点】

- ・上記【評価できる点】に記載した状態がある反面、「保育・教職実践演習（幼稚園）」においては、そのうちの1クラスのみがいまだに他のクラスに比べて平均点（71.8点）は低く（10クラス中6クラスが平均点が85点以上、3クラスが平均点76点以上）、S；0人、A；3人、B；1人、C；4人、D；0人という評価になっていることから、更なる改善が必要と考える。

生活実践科学科

【評価できる点】

- ・特になし。

【改善すべき点】

- ・学科 DP6に関連する「栄養学」において、履修者の14%が単位を修得できておらず、得点状況から「レポート課題の未提出」ならびに「提出していてもその内容が不十分」

などの要因が考えられたことから、来年度に向けてその改善策を講ずるべきと考える。

「数理・データサイエンス・AI」の教育プログラムの内容や手法等

【評価できる点】

- ・「情報リテラシー」と「数理・データサイエンス基礎」の双方ともに、授業評価アンケートにおける学生の満足度が高い値を示していることを評価する。

【改善すべき点】

- ・「数理・データサイエンス基礎」の授業内容はどのようなものなのか、また、その内容は、DP に沿ったものになっているのか、現状ではシラバスを見ても詳しい内容が分からないことから、少なくとも学生に分かりやすいように改善すべきと考える。

3-4. 外部評価委員からの意見（提言）

学生調査及び語学グローバル

- ・いくつかの学部で、例えば「3年次終了時点での累計GPAの平均値は2.46であり、適切な指導が行われていると評価できる」というように、累積GPAの平均値を適切な教員指導の根拠としていることに疑問を感じる。GPAはあくまで学生自身の頑張りの指標を示す数値であり、学生のGPAの数値が高いことは教員の指導がいいことにはならないのではないかと。GPAの数値が教員の指導ともある程度の相関関係があるという学科の考えは理解できるが、単純にGPAの数値をもって評価するのではなく数値をどのように考えているかをシートに記載すれば、この問題はなくなると考える。特定の科目とDPの結びつきもあるが、GPAを総合的ではなく、多角的に見ることで、どのように学生の意欲を保ち、大切に育てているかを書いていただきたい。
- ・3年生 ALCS 成長群において、全体的に「やや増えた」の回答が一番多くなっているが、「やや増えた」を含めて十分に達成されたと評価することに、いささか疑問を感じる。「やや増えた」ではいい評価にあたらないので、「とても増えた」という回答を増やしていくべきと考える。また、設問の「45 英語以外の外国語の運用力」、「49 国際的な諸問題に関する関心や理解力」、「50 英語の運用力」の項目が何れも現状高くはないが、大学としてグローバル化対応を進める以上、改善が必要と考える。
- ・PROG の全体的な傾向として、「他の大学と比べてリテラシーは高いが、コンピテンシーは低いという傾向が出ている」と報告書にまとめられており、今後、コンピテンシーの評価点を上げていくことが課題と考えられるが、コンピテンシーとリテラシーは独立したものではなく、一方を高めればもう一方も刺激され、高まるという関係にある。コンピテンシーからリテラシーを高める、学生が自分の行動特性に気づき自分を発見出来るような手法を全学的に共有し、相互に考えていただきたい。例えば、今後の数理データサイエンスのプログラムを運用するにあたり、各学部教員の協力体制の他に、学生

の力を活かし、学生をサポートスタッフとして雇用することで、コンピテンシーやリテラシーの向上に繋がるのではないか。

- ・学内にグローバルゾーンのような空間があれば、人が交錯する面白さを具体的に見せたり、その空間で外国語が話せたり、外国の話を書くことが出来ると学生のためになるので、そのような場所の設置を検討いただきたい。

人文科学部総合歴史学科

- ・総合歴史学科において、「2年次生の GPA 平均値は 2.43 であり、4年次生の GPA 平均値 2.49 と同等の高い水準を保っている」という文章が各 DP で記載されており、少々頻出気味のように感じた。「高い水準」とは何を示すのか疑問を感じる。GPA は学生自身の頑張りの指標を示す数値、傍証ではないのだろうか。GPA の水準が一定レベルに保たれていることについて大学側が指摘、分析する際の中身は何であるのか、GPA の数値について全学で検討されることを期待する（例えば、教育学部初等教育学科では別のデータと GPA をクロスして相対的な検証を行っている）。今後、総合歴史学科では点検においてクロスするデータの種類が増える可能性があるとのことだが、どのようなデータを想定する予定であるか、GPA の再考も含めて検討されることを期待する。さらに、GPA の位置づけ、それが何によって支えられているのかということを含めて全学的に考える機会としていただきたい。

経営学部経営学科

- ・経営学科において、法律分野の履修、リーガルリテラシーは非常に大切であると考えている。就実大学・就実短期大学としては、産業界、識者の意見も数年に一回は聞いていただき、OB・OG の意見を集約することで、プロダクトアウト・マーケットインとしてさらに改善につなげていただきたい。
- ・経営学科において、「長期インターンシップ」の評価が全体的に高いものの、インターンシップ先の評価が反映されていないことに疑問を感じる。インターンシップ先の企業の立場や、期日までに評価を貰えない（無理を言いにくい）事情もあるかもしれないが、多くのインターンシップの受け入れ先企業は真剣に行っているため、企業の率直な意見は大学に取り入れていただきたい。
- ・経営学科における PBL に関して、個人的には大変期待している。インターンシップよりさらに、ビジネスのダイナミズムや、面白さ、大変さ等々、大きな学びの場になると予感しており、企業人として大学教育の一端にかかわれることに、喜びを感じている。「PBL については、実習運営委員会を中心に、外部企業等とのプログラム策定やシラバス作成に着手している。」とのことだが、大学、インターンシップ学生、企業で情報交換と素早い対応をし、切磋琢磨することで就実大学を代表する教育プログラムの一つとなるよう取り組んでいただきたい。

薬学部薬学科

- ・薬学部は卒業時アンケートの結果が全体的に改善されていることを評価する。

数理・データサイエンス・AI

- ・現在、文科省のプログラムとも呼応して、非常に多くの大学でデータサイエンスを文系の学びに接合する動きがあり、かつ、大学改革と絡めてデータサイエンスを謳った学部や学科への改編、専攻設置が顕在化している中で、今後の就実大学の全学共通科目としてのプログラムについて注視していきたいと考える。
- ・多くの大学が数理・データサイエンスを取り入れたカリキュラム教育を行っているので、是非とも貴学独自の教育を示していただくことを願っている。
- ・数理・データサイエンス・AI教育プログラムの根拠資料より、プログラムはうまくいっていると思われるが、座学での講義とは別に、AI活用をしている企業に見学、フィールドワークをしてみることを提案する。
- ・就実大学は、文部科学省の数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）に認定されているが、数理・データサイエンス・AIリテラシープログラムに関して、現在シラバスをみる限り、各学部で全て同じ内容を教えているように見える。リテラシーレベルのプログラムを考えた場合、学生の専門に基づくビックデータの取り扱いも必須になってくるため、各学部で同じ内容ではプログラムとして不完全ではないだろうか。さらに、講義担当者も2名という少人数であるようだが、各学部に対応した講義に取り組んでいくためには、担当者の人数を増やすべきではないのか。
- ・データサイエンスに苦手意識を持っている学生に対しては、学修支援と学修態度の改善という二つの観点からフォローが必要だと考える。学修支援の場合は、学生がデータサイエンスについて学ぶ意欲はあるが、なかなか授業に付いてこられない。このような学生に対してのフォローアップが必要であり、一方、学修態度の改善の場合は、データサイエンスの授業に向かう姿勢そのものがまだまだ未熟な学生に対してフォローが必要と考える。特に貴学の場合は今後、「データサイエンス関連科目による副専攻コースの設置」を考えているとのことだが、副専攻コースを設置した場合、コース履修（単位取得）の為に学生はかなりの時間等、負担が増えると考えられるため、学生に対する丁寧なフォローアップをお願いしたい。
- ・「数理・データサイエンス基礎」のシラバスにおいて、「事前・事後学習の内容と時間」の欄には「課題に取り組むための時間を含む復習時間は週 3 時間程度を目安とする。」との記載があるものの、授業評価アンケートの「Q3. あなたはこの授業の予習・復習・課題提出などをどれくらいしましたか。週平均時間で教えてください。」の質問に対しては「情報リテラシー」と「数理・データサイエンス基礎」はともに、半数以上が「1時間以内（180名弱）」および「していない（80名前後）」となっている。これらの不一致に対する改善が必要と考える。

以上